

陸軍演習場から生まれた町あれこれ

<1> 三角原の千種神社

千葉市花見川区のほぼ中央部に「千葉鉄工業団地（通称：鉄工団地）」がある。我が家から徒歩圏にあるので時々散策路として愛用している。鉄工団地の南側の住宅地と隣接した所には、地主を思わせるような豪邸があったり、近頃話題になっている宗教団体の研修所があったりで、目の保養材料には事欠かない。

碁盤の目のように整然と区画された道を裏通りに入ると、立派な造りの千種神社があった。（右下画像）

境内に建つ石碑に、こんな言葉が刻まれていた。（石碑に書かれた段落どおりに書写）

昭和二十年八月十五日大東亜戦争終結と
同時開拓業務に挺身し同二十四年十一月
伊勢神宮より御霊代を勧請し氏神として
この地に迎えた神殿は戦前旧陸軍砲弾着
監則所を利用し千種神社と尊称す
爾来三十八年幾多の辛酸を経てその業成
り時勢の変遷を映し大きな変貌を遂げんと
する時千種町発祥の由来をとどめ
之を記念し神社を建立し永く後世に伝え
るものなり

昭和六十二丁卯歳師走吉祥日

さらに歩を進めると、立派な石の「千種開拓碑」が鎮座しており、本殿近くの石碑には、「千種神社の由緒」として一文がしたためられていた。（句読点はそのまますり、読みやすいように、私の意図で要所に改行を入れた）

昭和二十四年十一月二十日入植者総意により、心の拠りどころとして
伊勢神宮より御霊代を分祀鎮座祭を行い、神をこの地に迎える。（祭神天照皇大神宮）
当神社は、元旦祭、秋季祭、七五三祝事、神前結婚祝事、神官は常駐しないが、
犢橋町三社神社の金子宮司で分祀以来、代々奉仕しています。

祭神、家内安全、無病息災、海運厄除、交通安全、安産子育て。

昭和二十年八月十五日、大東亜戦争終結と同時に

食糧増産の国策に従い、当地区は旧陸軍下志津原演習場（旧称千葉郡犢橋村大字三角）

四街道まで（約三、〇〇〇町歩）一眺に見通しができた原野、

終戦と同時に近衛師団農耕隊として現地に在りました隊員と、

代官町の原隊からの復員者を基幹として、宮内省禁衛府農場として発足した。

農場発足後、半年余にて禁衛府農場も解散、そのまま帰農組合を結成し

組合の名称を宮中に求め、正穀千種の名を冠し千種農場とした。

後に、昭和二十九年七月一日犢橋村は千葉市と合併し、

同時に当地区は千葉市千種町と呼称することになりました。

開拓者が名付け親であります。

当初、神殿は戦前砲弾着視所そこを使用通称ダルマ監的、

現在の建物は昭和六十二年十二月建立されました。

（千種神社はここ <https://yahoo.jp/yON3E8> ）

明治維新後の富国強兵政策を起点にした軍事力強化と大陸侵攻が進み、下総の台地はことごとく陸軍演習場となり、太平洋戦争終結まで軍国日本を支えることになった。

大正時代から昭和初期頃の国土地理院の地形図を見ると、花見川の岸边から東へ四街道に至るまでの広い



場所に「陸軍演習場」と表記があり、現在私が住む町の南側には、演習場の中の地名として、「三角原・三角台・長沼原・長沼台」などの表記がある。(三角＝「さんかく」と読む)

千葉県犢橋村(こてはしむら)の南端には徳川家康が東金へ鷹狩りに行くために作られた御成街道が一直線に走り、北部には花島・柏井・横戸・宇那谷等の集落が点在し、これらを結ぶ佐倉道・成田道・千葉道などの古道が走っている。下総の原野の中の「民の暮らし」が見え隠れする中に、警戒標・展望観測所・監的・模造家屋などが随所にあり、大原野の真ん中を軍用鉄道と鉄道連隊の演習線の軌道が走っていた。

おそらく土着の人々が持つ土地の一部も演習場用として接収されたのではないかと思う。

北部には下志津原射場、四街道市との境界あたりには六方野射場、犢橋村の南部には三角原射場があった。昭和20年8月、終戦を迎えると同時に近衛師団農耕隊が編成されて、食糧増産を目的として演習場跡地を活用すべく開拓が始まった。開拓に加わったメンバーは、近衛師団農耕隊の隊員の他に、東京代官町の近衛師団原隊からの復員兵が中心となった。

近衛師団は、天皇と皇居を守ることを任務とした陸軍の中の師団で、第一師団から第三師団まで三つの師団が編成されていた。明治4年に薩長土の三藩から一万人の献兵を受けて編成した政府直属の軍隊(御親兵)がその始まりと言われており、初代の総帥は西郷隆盛だったそうである。

昭和20年8月の終戦後軍隊が解体したことで、皇宮警護の機能は宮内省の中に「禁衛府」という名称で再編成された。旧近衛師団及び皇宮警察から選ばれた精鋭をもって編成され、今風に言えばエリート集団だった。千葉郡犢橋(こてはし)村の一部が、終戦後に開拓されて「宮内省禁衛府農場」となり、のちに「千種農場」と改称された。農場の名は、宮中に命名を求めて決まったもので、1888年(明治21年)に落成した皇居西の丸にある明治宮殿の「千種の間」に由来するらしい。

昭和29年、千葉郡犢橋村が千葉市に吸収されて「千葉市犢橋町」となった時に、三角原の中央部にあった千種農場一帯は「千葉市千種町」という町名になった。(<https://yahoo.jp/De3Uw8>)

そしてさらなる変革として農業から工業へのシフトも進み、「鉄工業団地」と住宅地という形で現在に至っている。

<2> 四街道の鹿放ヶ丘

昭和20年8月終戦となり、その混乱で国中がごった返しの状態になった。折から食糧不足は深刻な問題で、旧陸軍の野砲連隊の演習場だった下志津原も、開拓団が結成されて食糧増産のための開拓が行なわれることになった。復員者が続々と集る中で、開拓団の要請に基づき茨城県内原から満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練学校の生徒約130名が援農要員として加わった。彼等は14才～17才の若者で、戦争が続いていれば我が国が手に入れた満州・蒙古の土地を開拓するために大陸に送り込まれる予定だった。

当初は「援農」という位置づけだったのだが、昭和23年に「入植者」の資格が与えられた。

昭和22年この地区を「鹿放ヶ丘(ろっぽうがおか)」と命名し、「鹿放ヶ丘農苑開拓農業協同組合」を設立して開拓に尽力した。集団生活・共同経営の形で開拓と農業が進められたが、昭和26年頃から個人経営への移行が進められた。昭和30年に区域内に鹿放ヶ丘神社を創建。豊受大神を主祭神として、開拓民の心のより所とした。(右画像)



前述の旧満蒙開拓青少年義勇軍訓練学校から来た若者達もこの地に根を下ろし、結婚して次の世代を育てたようだ。

明治時代より陸軍の演習場であった下志津原を含む広大な原野は、江戸時代から「六方野」と言われていた。六方野から小金原にいたる原野では鹿狩りも行なわれていたことから、当て字として「鹿放(ろっぽう)」が採用されて、「鹿放ヶ丘」という地名が誕生した。

この開拓地は現在、四街道市鹿放ヶ丘という町になっている。(https://yahoo.jp/_pFJMz)

鹿放ヶ丘のほぼ中央部に、鹿放ヶ丘ふれあいセンターという四街道市の施設があり、歴史を語る資料が残されているばかりでなく、地域の交流施設としても存続しており、敷地内に鹿放ヶ丘神社が祀られている。

(<http://www.roppogaoka.jp/>)

<3> なぜ三角町なのか

江戸時代以前は、花見川の支流である勝田川の源流に広がる台地を千葉野、六方野などと呼んでいた。現在の地名で言えば、千葉市花見川区・稲毛区・若葉区・四街道市にまたがる広大なエリアになる。

江戸時代には、六方野のかなりの面積は入会の秣場になっていたが、明治に入り軍事力強化を目指す国策によって異変が始まった。前述の様に陸軍の演習場となった六方野には射場がいくつも設けられ、入会の秣場は接收された。民家の並ぶ集落にも、観測所・監的などの演習のための設備が設置され、砲弾が飛び交うところで暮らすことになった人もいた。

演習場となった場所には、三角原（さんかくはら）・三角台（さんかくだい）などのように演習場としての地名が付けられた所もあり、終戦後にそれが地名として残ったものも少なくない。

「御成街道の犢橋村から宇那谷村に向かって北東に走る道」と「稲毛方面から北に向かう大和田街道」と「花島村から下志津原の南端に向かう東南東に走る道」の三本の道が二本ずつ交差する場所は、三角形が描かれたようで地上絵を思わせるものだったらしい。特に軍用機から見下ろすと顕著で、軍隊の中ではこの台地を「三角台」と呼び、その東に広がる平原を「三角原」と呼ぶようになった。当時の国土地理院の地図にも明記されていた。（三角町の由来となった道路が描く地上絵の名残は、こちら <https://yahoo.jp/UtaSYhV> ）

同じように演習場内の地名がいくつも誕生して、終戦後これらの軍隊内地名は、各地の「字地名」として残ったり、開拓地の名前として使われたりした結果、千葉市や四街道市の町の名として引き継がれたものも多い。

三角原・三角台が存在した一帯は、「千葉郡犢橋村大字三角（さんかく）」と呼ばれるようになった。昭和29年、犢橋村が千葉市に統合されることになった時に、思わぬ事件が起きてしまった。

<1>項に書いたように、千種農場が独立した千種町を名乗ることになったのだが、何と千種農場は「千葉郡犢橋村大字三角」の中央部にあったので、新生「千葉市三角町」は大穴を開けられて、馬蹄形になってしまった。ところが三角町の不運はこれで終りではなかった。周辺原野を切り開いて千葉県住宅供給公社が「こてはし台団地」を造成したことで、昭和46年に近隣の町の一部が「こてはし台」という町名に変ることになり、三角町の北側の一部がその対象となった。その結果、残った三角町は二つに分断されてしまい平仮名の「い」の字のような形になってしまった。（ <https://yahoo.jp/Ninecn> ）

昭和48年からこてはし台団地に居住する私としては、三角町の方々に申し訳ないような感じがしてならない。

<4> しめくり

広く「習志野が原」と言われたり、細かく見て下志津原・六方野原・三角原・長沼原などと言われたりしてきた下総の原野は、明治維新の後大きな変容を重ねる結果となった。

広大な演習場が広げられるにあたり、農地や山林を手放すことになった人もいたし、入会秣場などとして使われてきた原野が「富国強兵」の旗の下に演習場になってしまったり・・・。

そして明治維新から数えて約80年を経て、太平洋戦争の終結を迎えたあとは食料不足を補うために開拓地となり、多くの人がこの土地に汗を流し込んだ。前記のいくつかの例のように、開拓組合を作って大規模な開拓が行なわれて新しい農地や集落ができた。

これらの町は、まとまった面積と矩形に区画された町で航空写真を見ると整然とした町並みで、すぐに目につく。「三角町のあゆみ」（三角町自治会編・千葉日報社）という図書に、終戦後に六方野の開拓にあたった開拓組合とそのあらましについてまとめてあったので、借用してここに貼付け、新たに入手した情報を加筆した。

そんな動きの中で入会秣場として存続し、演習場にならなかった六方町（稲毛区）のような所もある。

そしてさらに約80年を経て、引き続き農業や牧畜が行なわれている町もあれば、工業にシフトした町もあり、首都圏のベッドタウンとして住宅地になった町もある。

我が国の「近代化に合わせて変貌した町」と言ってしまうと美しい響きになってしまうが、悲観的・自虐的に言えば「国家の政策に翻弄された町」と言うこともできるかもしれない。

千葉という町を考える時、いつもこの辺で堂々巡りになりすっきりしない気分になってしまう。

補足資料:六方野の開拓にあたった開拓組合

開拓組合名	主な組合構成員	運営形態	現在の町
大日	野戦重砲学校の復員者	当初は共同経営 昭和21年から個人経営に移行	四街道市 大日
鹿放ヶ丘	満蒙開拓青少年義勇軍	当初は共同経営 昭和24年から地区に分化	四街道市 鹿放ヶ丘
長沼	戦車学校、防空学校などの復員者	曙・池の辺・千幸・千葉の四組合 が昭和23年に合併	稲毛区 長沼原町
千種	旧近衛師団関係者	当初は共同経営 昭和21年から個人経営に移行	花見川区 千種町
山王	下志津飛行部隊関係者	技術者多く半工半農経営多し	稲毛区 山王町
天台	歩兵学校関係復員者	当初は共同経営 昭和22年から個人経営に移行	稲毛区 天台
天台新生	?	昭和24年に天台から分離 共同・個人経営併用	
下志津	野戦砲兵学校・陸軍航空教育隊	のち上志津原・勝田分団を分離	
上志津	陸軍航空本部・岩井紙会社	個人経営のみでスタート	
畦田台	農林省の斡旋による	共同経営で酪農を目的とした	
同愛	傷痍軍人会の斡旋による	当初は共同経営 のちに個人経営に移行	

以上